

もろびつとじつこの日本への旅

人類学者

川田順造

●第一部 ● 江戸東京の下町が「記憶」するもの

荒ぶる自然に、心を託す

江戸Ⅱ東京を支えた周辺の鄙

「奥の細道旅立ちツアー」に参加したおかげで、芭蕉という相当に風変わりな、それでいて三百年ものあいだ、日本人の心に触れつづけてきた人物について、これまで気にとめたことがなかった形象化された「像」のあれこれに接しながら、私はあらためて考えさせられた。そしてこの風狂の輩を受け入れて育てた、本所深川という土地や、江戸Ⅱ東京を支えた鄙の一角としての千住の、奥深い豊かさについても。

千住という土地が深川とも関わりをもっていたことは、川並の故老にお話をうかがったときにも知った。紀伊、尾張、三河、駿河などから海路送られて来て、かつての木場に貯木された木材を、大型の筏いかだに組んで、上げ潮のとき、他の船の通っていない夜中の隅田川を、千住まで運んだのだそうだ。

潮を見計らって、長い筏を一人で竿さおであやつり、「橋なんかちよつとでもぶつけりゃあ、バラバラになっちゃう」、雪の夜更けなどには、孤独な、熟練の要る作業だったという。寒さと眠気を吹き飛ばすのに、大声で川並の木遣り（鳶の木遣りとは別にある）を歌いな

が徹夜で千住にとどける。材木はいったん千住の間屋でさばかれてから、内陸の各地に配送された。

帰りは竿をかついで、木遣りを歌いながら、土手づたいに深川まで歩いて戻って来る。危険の多いむずかしい仕事であるだけに、この仕事ができる川並は報酬も多く、門前仲町芸者とのつきあひも派手だったという。

深川高橋北詰にある、いま五代目のどじょう屋の中興の祖、三代目にお話を聞いたときにも、関東大震災で日本橋の魚河岸がなくなつてからは、川魚の伝統がある千住の間屋から、軽子がどじょうや鰻を運んで来たのだそうだ。店専属の「取り子」がもつて来る、千葉、埼玉など近郊の、当時はまだ田圃や沼で捕れたどじょうも、使っていた。

このどじょう店の初代は、行徳の小間物屋の息子で、はじめ日本橋横山町の籠甲屋に奉公して本所の立川にのれん分けさせてもらった。はかばかしくなくて、神田の鎌倉河岸でどじょう屋を始め、明治二十年に深川高橋に移ったという。

この話にも出てくる行徳は、何しろ徳川家康が江戸開府にあたって、行徳の塩を確保するために、それま

では濡^みだった小名木沢を、摂津の出で水利事業に経験のあつた深川八郎右衛門に開削させて、江戸時代以降戦前まで水運でにぎわつた小名木川にしたのだから、江戸⇨東京とは深いつながりがある。明治以後は、深川をはじめ東京下町の御興^{みこ}作りでも、腕の良い職人を抱えた行徳の店が活躍した。私が生まれた深川高橋の、金箔の町内御興も行徳であつたことは、この連載の第一回にも書いた。ことばの面でも、深川弁と行徳・浦安方言との類似が指摘されている。

江戸⇨東京を、周辺で支えてきた土地として、行徳、川越、そして千住などが挙げられるだろうが、それぞれに江戸⇨東京との関わり方に個性がある。川越は、よく「小江戸」とも呼ばれるが、行徳や千住との関わり方とはかなり違う。これらの土地の比較検討も、この連載でいづれ行なつてみたいことの一つだ。

千住の深さ、したたかさ

家康は、江戸に入府して間もない文禄三年（一五九四）、隅田川最初の橋として千住大橋を架けさせている。このことから、小名木川開削と並んで、家康が